

口頭発表：仮想通貨の貨幣性・非貨幣性*

小幡 道昭

2018年10月13日

目次

1	貨幣論のコア：商品貨幣説	1
2	貨幣の変容：信用貨幣	4
3	貨幣の多態性：仮想通貨	6

はじめに

今回は「変容論的アプローチ」とよんでいる方法論を貨幣論に適用し、最終的には仮想通貨まで脚を伸ばしてみたいと思います。

1 貨幣論のコア：商品貨幣説

■商品貨幣説 はじめに「商品貨幣」というタームについて注意しておきます。ここで商品貨幣説とよんでいるのは、商品から貨幣を説明する理論のことです。財を起点として貨幣不在の物々交換型市場をコアとするミクロ経済学の一般均衡論の対極をなすもので、マルクス経済学の貨幣論はみなこれに該当します。商品から説明するということは、商品の価値から説明するということで、商品体から説明するという意味ではありません。ときどき、商品貨幣説を物品貨幣説と混同している人がいますが違います。物品貨幣の典型は金貨幣ですが、商品貨幣説イコール金貨幣説ではありません。

■モノと財 まずカタカナの「モノ」の話です。『資本論』で「商品体」とよばれていますが、それ以上分析されることのなかった概念です。基本的に五感に現れる対象、哲学者の用語法かもしれませんが「知覚」perception の対象が「モノ」です。この「知覚」という用語は、以下の話の基礎なので、是非ご記憶ください。

モノは物理学や化学で扱う、重さ、長さ、時間などの単位をもち、だれが計っても同じ「物量」になります。だから、物量は人ではなく、モノに属する性質、モノの属性です。

* 経済理論学会立命館大学大会 報告, ver. 3.01 口頭発表用原稿:圧縮版

次に財の定義ですが、財とは有用なモノのことで、客観的に計量可能な物量と違い、有用性 — あるいはミクロ理論の人たちの使う効用 — のほうは、人によりまちまちで、客観的に計ることはできません。有用性はモノそのものに内属する性質ではなく、モノと人との関係から派生する属性です。

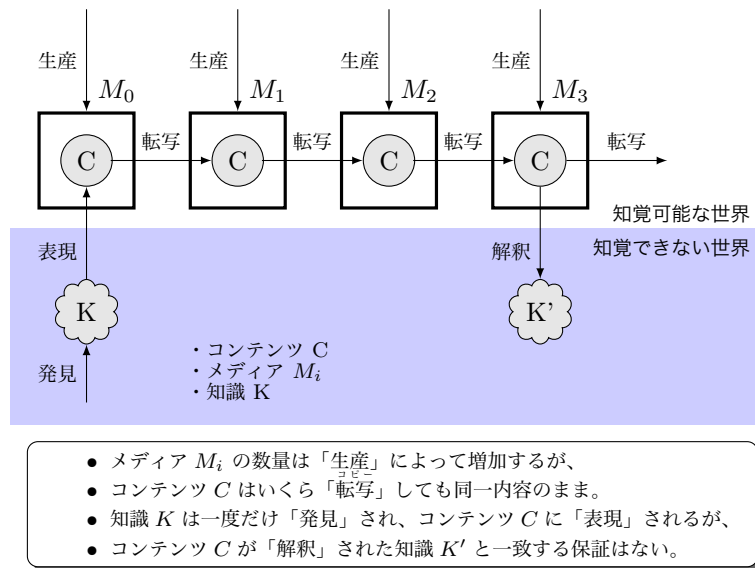
■メディアとコンテンツ 情報は、メディアとコンテンツの結合体です。コンテンツは、不可測な知識をだれにでも共通に読めるデータに表現したものです。コンテンツは、つねにモノであるメディアと結びついています。著作内容と本をイメージしてください。電子メールでもかまいませんが...

図をご覧ください。経済理論として広く情報の問題を考察するのに必要な論点はまだまだ多く残りますが、仮想通貨の場合のように、情報通信技術が貨幣に及ぼす影響を分析するには、最低限

$$\text{情報} = \text{メディア} \oplus \text{コンテンツ}$$

という定義は必須です。

図1 メディアとコンテンツ



■財と商品 財を有用性をもつモノなら、商品は有用性が百パーセント他人のためのモノとなった財です。重要なのはこの百パーセント条項です。この点を曖昧にすると、相対的に有用な財と無用な財とを交換し効用を高める、ミクロ経済学の物々交換型の市場に五十歩百歩になってしまいます。「他人のための」という規定を厳格に与えること、商品と非商品を明確に切断すること、これがミクロ経済学とマルクス経済学の決定的な分岐点です。

■商品価値の潜在性と内在性 他人のための有用性しかもたない財が所有されているのは、それが他のどの商品とでも交換できるからです。この「交換できる」という性質、交

換可能性が「価値」の第一定義です。大切なのは、この交換可能性の意味を厳密に規定することです。それにはまず、個々の商品がおかれた《場》つまり環境を明示する必要があります。個々の主体には無限にみえる多種多様な商品が存在するという①無数多様性と、同じ商品が

報告ペーパーに書いておいたのでここでは証明は省きますが、①多数の種類の商品が無数に存在すること、しかも②同じ種類の商品が大量に存在すること、この条件があると、①価値はどの商品とでも交換できる「全面的交換可能性」である、②価値はその所有者ではなく商品種に属する性質となる、という結論がでてきます。要するに、商品には、特定の商品に対してではなくすべての商品と交換できる価値が内在するということになります。

■商品の価値表現 潜在的かつ内在的な全面的交換可としての価値存在は、価値表現を必然的なものとしします。「価値がある」ということは、すなわち「価値が現れている」ということと不可分です。「陽を背にたつ人に影がみえる」ように両者は一体なのです。あるいはもっと強く、「表があって裏がないコインはない」ように「表現をもたない価値は存在しない」というべきかもしれません。この「表現」は原理的には「現象」と同じです。知覚できない「何か」が、知覚可能な世界に「表される」「現れる」ということです。

■一般的等価物 価値の表現様式 die Ausdrucksweise ないし現象形態 die “Erscheinungsform” という問題をはじめて明確に定式化したのは『資本論』です。第1部第1章第3節「価値形態または交換価値」がそれに当たります、今日はパスします。基本は、ある商品の価値表現という入口からはいって、すべての商品が、共通の一般的等価物によって、その価値を表現するという出口に抜ける推論体系です。だれもがこの出口にでてこれるのは、出発点の商品が、どの商品とでも交換できる、潜在的だが全面的な交換可能性をもっているからです。

推論体系としての価値形態論は、この一般的等価物の導出で終わりです。しかし、「一般的価値形態」までの理論的展開と、「貨幣形態」の歴史的記述との断絶に大きな問題が潜んでいます。

■一般均衡論 私はミクロ経済学と対峙するなかでこの問題に気づきました。彼らのコアである一般均衡論の中心命題は、価格をパラメーターに各主体が最適化を達成する「主体均衡」と同時に、すべての財に関して需要と供給とが完全に一致する「市場均衡」が成立するというものです。ミクロ経済学の教科書をのぞいてみると、均衡価格の決定原理については詳細に説明されているのですが、均衡価格が成立したとして、では、どうやって交換するのか、交換過程については何も書いてないのです。

よくよくきいてみると、要するに一般均衡論が描く市場は「間接的物々交換」の場なのです。需要に供給が完全一致すれば、欲しい財に対して均衡価格で交換を求めれば物々交換できるのです。欲しくない財をもってこられても、黙って受けとればよいのです。受けとった財をもって欲しい財のところへゆけば、相手は必ず交換に応じます。お約束です。こうして交換が進むと、最後に欲しい財と欲しい財が巡り会って、全員ハッピーエンドで

終わるのです。マルクス経済学の言葉で言えば、全面的交換可能性が潜在的ではなくなっているのです。

■持続的等価物 これではっきりしたのですが、マルクス経済学の「貨幣が実在する市場」は、商品がすべて捌け、カラの状態になることは決してありません。つねに価値を示す価格で売れるのをまつ同種大量の商品在庫で充たされています。だから、商品価値を表現する等価物は、たえず市場にとどまり続ける持続的等価物でなければならないこととなります。時間の流れのなかで、等価物として機能しつづけるには、期間を通じて価値の大きさが相対的に安定した持続的等価物が要請されることになるのです。

2 貨幣の変容：信用貨幣

■仕様と実装 ここまでの結論を一言でいえば、

$$\text{商品貨幣} = \text{一般的等価物} + \text{持続的等価物}$$

ということになります。ただこの定義は商品から要請される貨幣の仕様で、これを知覚可能な世界に実装するには、外的条件が必要です。一連の条件 P で実装された場合でも、別の条件群 Q で実装された場合でも、基本的に同じ仕様を充たすことができるのです。

■多層化 外的条件の追加は、貨幣論を多層化することになります。貨幣の定義は、ここでまず、商品貨幣説に基づく共通の基本仕様と、異なる外的条件による実装方式という二層のレイアに分かれるわけです。

■物品貨幣 金貨幣の場合も、その実装には外的条件が必要です。その価値の安定性は、金が市場において大量のプールをかたちづくり滞留していることによって充たされてきました。そのうえで、金貨本位制と冶金技術の発達が不可欠でした。単に制度だけではなく、技術の面もここで強調しておきたいと思います。

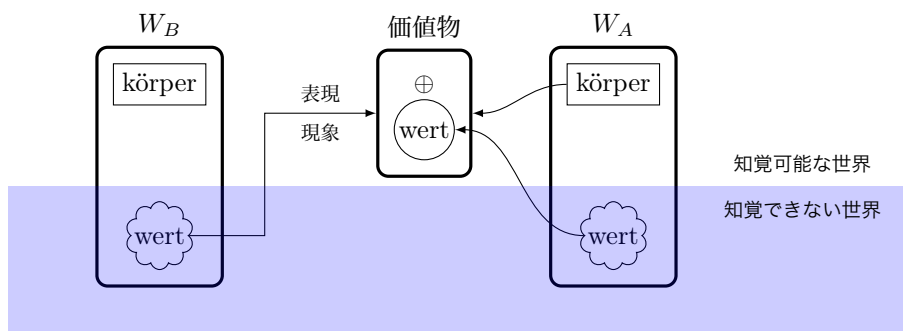
■信用貨幣の規定 「信用貨幣」という用語をここでもちだすのにはもともと無理があるのですが、金貨幣とは異なる別の方式にはられたラベルだということでお許しください。求められているのは、眼前の貨幣現象を念頭におきながら、それを抽象化してゆけば、一般的等価物 + 持続的等価物の仕様が、充されていることを論証することです。難しいのは、一般的等価物という仕様の充足問題です。この問題に答えるには、商品価値の表現という商品価値説の原点にもう一度さかのぼってみる必要があります。

■価値物 価値表現における等価物は、等価物といってもだだの「モノ」ではありません。内在的な価値が知覚可能なモノと結合した「価値物」です。価値表現における等価物は、知覚できない価値と明確なリンクを保持する必要があるわけです。ただ、この「価値物」の構成原理は一通りではありません。(スライド) 図のように、物品貨幣の場合も、実は商品の属性であるモノ *körper* に価値 *wert* を埋め込んでいるのですが、ただ同一商品でこれがなされるために、埋め込みがみえにくいのです。『資本論』の場合も”上衣の商品

体を価値物として、これにリンネルを等置する”というので、単純に、”上衣の商品体そのものでリンネルの価値を表現している”とはいいません。ただ「価値物」の定義が明示されていないのでいろいろに解釈できますが。

信用貨幣の場合、「価値物」は、ちょっと複雑ですが、一種の結合商品を媒介に構成されます。ある商品 A を基礎に他の商品 C を借りるという形式で、基礎となる商品 A の価値が、借りる商品 C の側のモノの量、物量と結合するのです。別々の商品の「モノ」と「価値」が結合して価値物が構成されるわけです。抽象度の高い貨幣論レベルでは説明が難しくなりますが、既存の信用論を睨みながら考えてみれば大筋はわかると思います。

† 物品貨幣型：



‡ 信用貨幣型：

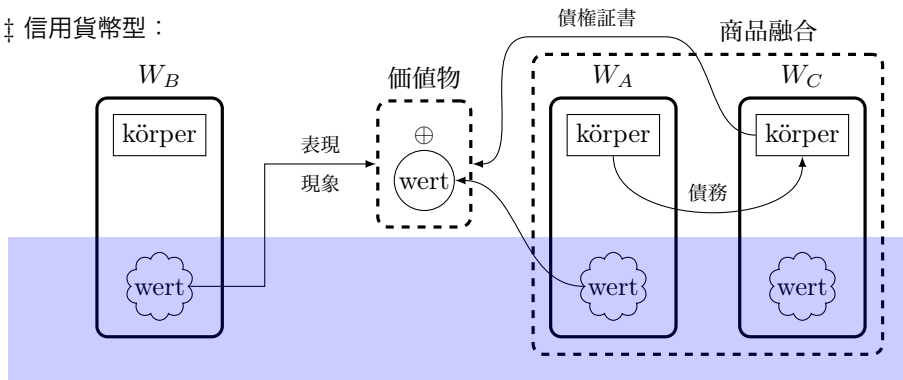


図2 価値物の構成方式：物品貨幣型と信用貨幣型

■信用貨幣の価値代表性 このように「価値物」を生成する方式には違いはありますが、信用貨幣も、「価値物」を等価物とする価値表現の方式は、物品貨幣と同じです。商品貨幣説にたつかぎり、商品価値の表現には価値物の生成が必須の要件となります。「等しい」ことの根本には、やはり価値が「同じ」だという関係があります。ただ、「同じ」だとされる価値が直接知覚できないため、商品構成するモノの量と価値を結合した「価値物」を生成し、これによって「等しい」という表現がなされるわけです。したがって、いくら計量可能性に秀でていても、価値とのリンクをもたない単なるモノでは、商品に内在する価値

は表現できません。信用貨幣は、外形がどんなにそっくりでも、商品価値とのリンクをもたない国家紙幣、フィアット・マネーと原理的に交わる部分は存在しないのです。

■信用貨幣と情報 このように考えると、信用貨幣が本質的に情報と結びつくことがわかります。情報が「情報メディア」と「情報コンテンツ」という二つの属性をもち、同じ「情報コンテンツ」を異なる「情報メディア」に転写することも、逆に同じ「情報メディア」に異なる「情報コンテンツ」を転写することもできる可換性を本質とすることはすでに述べました。信用貨幣の価値物は、その生成過程で、ある商品の価値を別の商品の商品体に転写することをやっているのです。債権というかたちをとった「価値物」ははじめから一種の情報なのです。

■信用貨幣における持続的等価物 信用貨幣が、さまざまな種類の商品価値を合成するかたちで価値物をつくりだす原理がわかれば、物品貨幣とは異なる方式で持続的等価物の仕様を充たしうることもわかります。金貨幣の場合には、他を圧倒するストック量によって価値の安定性が維持されていましたが、信用貨幣の場合、多種多様な商品価値の合成によってその価値の安定性は実装されるのです。

3 貨幣の多態性：仮想通貨

■多態化と変容 これまでのところで、商品貨幣の仕様と実装をきめる二つのレイアについて説明してきましたが、貨幣現象は、この二つのレイアですべて説明がつくわけではありません。最低限、このうえに第三のレイアを考慮しておく必要があります。第二のレイアに実装された貨幣からは、特定の機能をにう独自の機能形態が派生するからです。このような派生現象を貨幣の「多態化」polymorphism とよぶことにします。多態化は「変容」transformation とは異なります。

■変容と発展 ここで今までの話を整理しておきます。ポイントは「内的条件」と「外的条件」の区別です。「内的条件」というのは、たとえば商品の①「異種多様性」と②「同種大量性」のように理論展開のなかでユニークでコンシステントな条件群のことです。いわば原理論のスコープのなかで、どこでもいつでも参照できる共通のグローバル変数のようなものです。「純粋資本主義」というのは、こうした「内的条件」のセットにはられたラベルだと私は考えています。「外的条件」はいわばローカル変数で、たとえば金貨本位制と管理通貨制のように、同時には成り立たない排他的な条件群です。

この報告では、「内的条件」を追加しながら、ある領域から別の領域に論理を進めることを「展開」theoretical deveopment とよんできました。ここでは用いませんでしたが、「分化」や「発生」は「展開」のコロラリーです。この「展開」はしばしば「転化」とよばれてきたのですが、「転化」は transformation の訳語で、「変容」と重複し混乱を生むおそれがあるので避けました。

基本的な理論の組み立ては、①内的条件と外的条件を明確に区別し、②前者による移行を「展開」とよび、後者による移行を「変容」とよぶ、というかたちで、少なくとも

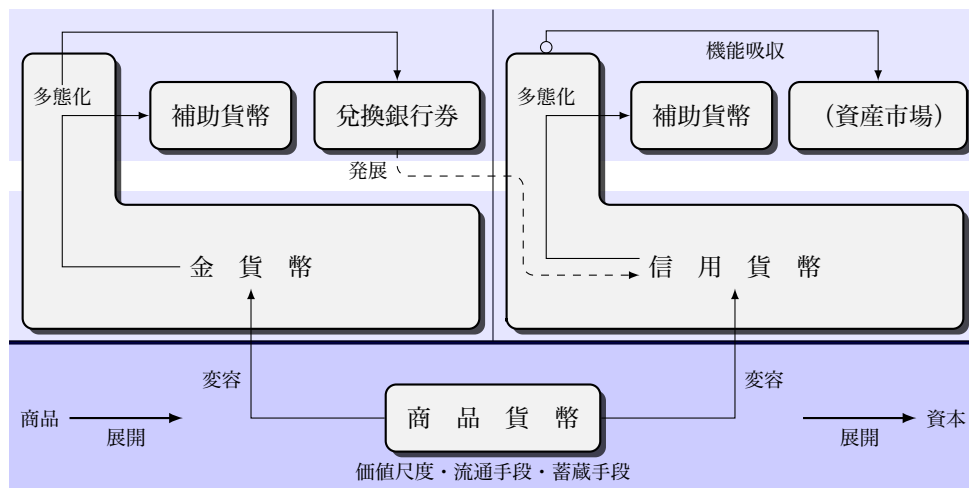
日本語ベースでは一貫させてきました。さらに外的条件の間には、たとえば金貨本位制から管理通貨制へというような「横の関係」が加わります。ここは理論的な推論の効かない領域です。理論からみれば外的条件 e_i と e_{i-1} は独立した排他的条件として、原論の開口部 $O(x)$ に作用し変容態 $O(e_i), O(e_{i-1})$ を生みだしますが、歴史的には e_{i-1} を前提に e_i が発生するという重畳性 $e_i(e_{i-1}(e_{i-2}(\dots)))$ によって不可逆な「発展」historical development が発生するわけです。

変容が互いに排他的な関係にたつものに対して、第3の多態化レイアを構成するものは、レイア2で実装態を前提に、その一部機能を補完する派生態です。したがって、どのように高機能となろうと、派生態は第3のレイアのなかでは派生源に取って代わることはできません。しかし、これから述べるように、「変容」と「発展」を結ぶ因子が潜んでいるように思われますので、お楽しみに。

これまで「移行」「展開」「変容」「転化」「発展」などの言葉は語感を頼りに、文脈に応じて適宜使い分けられてきたのですが、こうした「変化」に関わる用語を厳密に定義し、意識的に使い分けることが、変容論的アプローチへの第一歩となります。

■金貨幣のもとでの多態化 金貨幣のもとでの多態化は、マルクス経済学においてすでに馴染みの深いものです。派生態の代表は①補助貨幣であり②兌換銀行券です。補助貨幣をフィアット・マネーの範疇に含めることは一般的ではありませんが、私はこちらのほうこそフィアット・マネーの典型だと考えています。もう一つの派生態である兌換銀行券は、フィアット・マネーではありません。通説では、この兌換銀行券が信用貨幣の典型で、不換銀行券は不完全な信用貨幣としてされてきたようですが、これは逆です。不換銀行券こそ、典型的な信用貨幣として自立しており、兌換銀行券は物品貨幣に依存した不完全な信用貨幣なのです。

図3 多層性：変容と多態化



■貨幣性 いま、金貨幣のケースで多態化を説明してました。このように貨幣論を多層化しておく、それぞれのレイアに応じた貨幣としての性格、「貨幣性」を考えることができます。ある貨幣現象をさして、これは貨幣か、という単刀直入な質問にも、相手に多少とも (yes/no) × (yes/no) × … 型の演算能力が期待できるなら、「貨幣性」のレベルで答えることができます。

■信用貨幣における多態化 信用貨幣のもとでの多態化を、仮想通貨を睨みつつ、検討してみましょう。ここでは多態性のフェーズの転換が観察できます。まずフェーズ I です。ここでの派生態の代表は依然として補助通貨でした。他方、金貨幣のもとでは派生態であった兌換銀行券は、不換化されて商品貨幣の実装態としての信用貨幣にスカウトされたのです。これとともに、価値保蔵の機能の一部が、株式市場などの証券の世界に吸収されることになったと考えられます。断層、褶曲を引きおこす大造山運動です。

■非手交型貨幣のフェーズ フェーズ I はいま大きな転換に直面しています。情報通信技術の発展、コンピュータサイエンスとネットワーク技術の深化が生みだした信用貨幣の多態化のフェーズ II です。この外的条件は、仮想通貨の登場に先だって、信用貨幣をベースにした多くの派生態を生みだしてきました。具体的な事象は省きますが、一言でいえば手交型貨幣の後退です。ポイントは、レジットカードやプリペイド型貨幣（前払式支払手段）などの多態化が、いずれも預金通貨をベースとしているという点です。

■「仮想通貨」のコア 仮想通貨は、こうしたフェーズ II で登場したものです。外形的にも機能的にも、それはクレジットカードやプリペイドカードと大差ないようにみえますが、ただそのコア部分に立ちいってみると、同じことを目指して登場した上記の非手交型貨幣との間に決定的な切断が潜んでいことに気づきます。サーバマシンを中心とした預金通貨をベースとした派生態とは異なる面をもっているのです。

■「仮想通貨」の二重性格 現在の仮想通貨は、経済理論の貨幣論に対して無関心な設計になっています。ただ、銀行などを通じた送金・支払システムを、より低コストで安全におこなう技術を追求する結果、預金通貨を基盤とする、商品貨幣の実装態としての信用貨幣である預金通貨との断絶が生じています。その意味で二重性格なのです。

ここでついつい、兌換銀行券も二重性格をもっていたのではないかと考えたくなります。不完全な信用貨幣が自立した信用貨幣に「発展」したのではないかと、同じように仮想通貨もまた、商品貨幣の新たな実装態になるかもしれない、それには、仮想通貨が商品価値の表現を可能にする能力を実装できればよい……と。しかし、類推で推論ではありません。reasoning ではなく、speculation です。試合を楽しむ観客がすることで、選手がすべきことではありません。「似てる」といいはじめたときに、理論家の墮落ははじまります。「ここから先は speculation だ」と 10 回唱えたことにして、今日の報告は終わりにいたします。